

秘密の館

～ 運命が交差する一夜～

著者：道縄 鈴

序 章

あの館には扉がない。

……いや、正確には扉はあるのだが、扉を扉として認識できないと言った方が正しいだろうか。

物理的な扉はあるのだが、通れる者にだけ開く。そんなところだ。

まるで意思を持っているかのように煙のように揺らぎ、招かれざる者には冷たく黙したまま分厚い無音の壁と化す。

俺が初めてその扉を潜ったのは、もう三年も前になるだろうか。

『秘密の館』

それはどれだけ高い街案内に頼んでも決して辿り着くことはできない場所。ただ一つ、ウワサとしてのみ語り継がれる場所。

例えばそれが王族であろうと貴族であろうと、資格を持たぬ者が見つげ出すことはできないと言われている。

南大陸——イルティオレオ。

巨大な火山地帯と地下に流れる溶岩^{マグマ}によって温暖な気候が保たれている場所。その麓^{ふもと}に広がるのは巨大な温泉地帯。

観光地として有名な都市である【ユラン＝カルナ】だ。

温泉と美食、花火と灯籠。

異国情緒あふれるこの街は、今の俺にとってもはや第二の故郷と呼べる場所になっている。

この国で俺の名前を知っているものは少ないというのも嬉しい点だ。
まあ西方にいる傭兵団あたりでは『人喰い狩り』パニッシャーパニッシャーの二つ名くらいは広まって
いるかもしれないが。

俺は前線を離れて久しい。もしかすると忘れ去られているかもしれない。
だが今の俺にそういったものは必要ない。

過去の戦乱を生き抜いた残党の一人として名を連ねた実力者としての自分は
もういらないのだ。

もう、血は見たくない。

もう……疲れたのだ。

来る日も来る日も戦いに身を置く日々。

とある大国で名を残したばかりに俺に回されるのは貴族や王の刻印が入った
逃げられない仕事ばかり。

国章印の入っているような豪華絢爛な馬車で疲れたからと横になるわけにも
いかず、平民上がりのこちらを見下すような視線に晒される日々。

眠ることは出来ても身を休める暇はない。

あの時の俺は恐らく心身ともに疲れ切っていたのであろう。

激しい戦いではなく、静かな癒しを。

鋼鉄の刀剣ではなく、銀のナイフを。

いつか来るであろう平穏を夢見ては戦いの中でいかに美しく散るか。という
今にしては悍ましい考えに陥っていた。

だからこそ護衛任務で【森岩蠟】フォレスコールに出くわした時は感動すら覚えたほどだ。

俺は奴の頑丈な甲殻の隙間を狙い、巨大なハサミを切り落としつつも奴の尾
の毒を如何に油断したように受けるかを思索していた。

結果、まだ新米であった騎士を庇うという形で俺はそれを達成したのだ。

——だが、俺は生き残ってしまった。

聞けば、その騎士が高価な解毒用の魔法薬ポーションを俺に使ってくれたらしい。若くして前線に出るような新米騎士は、基本的に貴族として位があまり高いものではない。

ましてや冒険者を護衛に雇うような立場の人間は良いところ中級の貴族くらいだろう。

そして、そんな貴族の出だとしても新米の給料は高くない。

仕送りがあるのだとしてもそんなものは装備品や整備品の費用で吹き飛んでしまうことだろう。

つまり、その騎士はかなり生活費を切り詰めてまで高価な魔法薬を使ってく

れたのだ。

それはもちろん命を救われたからこそ。罪悪感と親切心からくるものなのだろうが、当時の俺からすればそれは余計なお世話だった。

——なぜ、あのまま俺を死なせてくれなかったのか。

ギルドの病床で横たわる俺に謝罪をする騎士へ、直接そんなことを言うことはなかったが、それでも俺の心は絶望に満たされていた。

蠍スコープの尾の一撃を真正面から受け止めた盾のように、俺の気持ちは粉々に砕け散ってしまっていた。

そして俺は毒を受けた痺れを言い訳にしてそのまま冒険者という仕事を半ば夜逃げのように手続きを済ませ、引退することにしたのだった。

……さて、改めて。

冒険者家業を引退した俺は、この温泉都市【ユラン＝カルナ】にやってきた。温泉の街と銘打っているだけあってこの場所は非常に素晴らしい。

硫黄の匂いは少々キツイが、大きな川にはマグマによって熱せられた温泉が流れており、それはこの街の名物にもなっている。

こういった原理なのかは分からないが、ここの湯は劣化した肌を癒す力が秘められているらしい。

実際、多くの貴族なども訪れている名所であり、その効能に偽りはないとのことだ。

専門家が竜脈がどうの言っていた気がするが正直よく覚えていない。

まあ、あの時は俺も余裕がなかったからな。

とはいえ湯治にこの場所ほどピッタリな街もないだろう。

聞き流していたとはいえ、貴族たちの与太話をよくもまああの時の俺が覚えていたものだと思う。

そして温泉以外の噂もこの街にはあった。

それが、【秘密の館】だ。

そこは何物にも縛られることのない場所。

血も、階級も、種族も……何もかもが意味を為さない。

あるのは異性との出会いだけ。

館で出会う彼女たちは俺と同じ、あるいは俺と似たように現実という耐えきれない境遇から逃げた者たちが多い。

年若い娼婦でもない。

媚びるだけの下女でもない。

ましてや怯えた目でこちらを見る奴隷でもない。

彼女たちには耐えきれない悲しく、辛い過去があり、今という時間を生きている人間なのだ。

……きつとそうに違いない。

少なくとも俺はこの何度目かの館での出会いでそう感じている。

俺たちは肩を並べて酒を酌み交わし、言葉を交わし、時に笑って、沈黙すらも分かち合う。

そして、その先にあるもの……それは互いの心が決めることだ。

『月が最も明るく照らす夜。霧の中を進むべし』

そんな噂話を信じて、今日も俺は満月の夜道を歩く。

一体、今回出会うことになるのはどんな女性ひとだろうか。

癒したいのか、あるいは癒されたいのか。

ただ一晩の遊戯。

たった一度の逢瀬。

もったいないと思う。出来得ることならば着いて行きたいとも思ったことがある。

だが、彼女たちにも生活があるのだ。

引き止めるわけにもいかないし、誰とも知らない男一人に手を貸す訳にもいかないのだ。

……それでも、俺はまたこの館に足を運ぶ。

静かな期待を胸に秘めて。

1 章 クラリッサとの邂逅

霧に包まれた裏通り、月明かりが照らすわずかな道だけを頼りに進むと、件の館は姿を現す。

館というものの屋敷のようなものが聳^{そび}え建っているわけではなく、重厚なレンガの壁と扉がいきなり目の前に現れるのだ。

何か魔法のようなものなのか、それとも古代の魔道具によるものなのか。

細かいことは俺には分からないが、現に目の前にそれは存在している。

ギギギ……。

と、手を触れるだけで重そうな扉が音を立てて開き、俺は高鳴る気持ちを落ち着かせてから一歩足を踏み入れる。

——とたん、空気が一変する。

周囲にある世界がぐらりと歪む。

色が、香りが、視界にあるものの全てが、別世界のものへと変わっていく。

上下の間隔を失い……気が付けば、俺は扉の中に入っていた。

(……いつになっても、この違和感は慣れないな)

たった数歩の移動。

しかしそこには見えないほどの次元の歪みが生まれているのだろう。

少なくとも並の魔力では再現できないものであるのは確かだ。

ポッポッポッ……。

そのまま静かに待っていると、小さな音を立ててランタンに炎が灯っていく。暗い空間が明るく照らされていき、目の前には天井から垂れ下がった濃紫の



カーテンによって遮られた高級感のあるカウンターが姿を現す。

「いらっしやいませ。本日もよくお越しくださいました『旅人』さま」

風もなく、カーテンの向こう側で何かが動く布ズレの音が鳴ったかと思えば、奥の方から声が聞こえてくる。

「ん、今日もよろしく頼む。支配人」

支配人……と俺は勝手に呼んでいるが、その人物が男であるのか女であるのかは俺にもよく分かっていない。

その掠れたような声は、高い男のようでもあり、低い女のようでもある。

そして、その容姿は常にカーテンの向こうに隠れており分からない。

光によって見ることが出来る影はフードでも被っているのか大柄で、カーテンから覗くことのある手は黒いグローブに覆われており、結局のところ判断が付かなかった。

とはいえ、その正体を暴きたいという欲求があるわけでもない。

俺は影の動きから小さく頭を下げているのであろう支配人に軽く返事をしつつ頭をすっぽりと覆っていた外套を脱ぎ、腰の皮鞆ポーチから黄金色に光る硬貨を取り出した。

【古代王国ソールの陽金貨】

表には幼き太陽神を抱く女神が、裏には選定の輪ギが刻まれた魔鉱石を宝石のように加工して作られた微かに魔力を帯びた硬貨。

この館で交わされるものはただの金銭ではないのだ。

「確かに承りました。それではこれより用意いたしますので、そちらにお掛けになってお待ちくださいませ」

スツとカーテンの隙間から手が伸び、陽金貨が一瞬にしてカウンターの向こうに消える。

声が聞こえ、言われるまま側にあった長椅子に腰掛けると、静寂が訪れる。これから会うことになる人物はどのような相手なのだろうか。

これまで出会ってきた人々を思い返しながら俺は腕を組み、静かに待つ。

「お待ち致しました『旅人』さま」

しばらくすると、カーテンの向こうから再び声が聞こえてくる。

カウンターの近くまで歩くと、テーブルの上に一枚のプレートが置かれる。一種の魔道具なのだろう。と思う。

そのプレートには何やら紋様らしきものが刻まれており、手に取るとほんのりと暖かく、スツと体が軽くなるような錯覚を覚えた。

硬い金属のような見た目ながら、柔らかい。

不思議な素材で作られたそれを、俺はいつも通り受け取ってポーチにしまう。

「本日は『第七室』にて、貴方様にピッタリのお方がお待ちになっております」

「ん、分かった」

「言うまでもないでしょうが、先ほどのカードは紛失しないようお気を付けを。

また相手が否定することを無理に行うことも厳禁ですので、ご了承ください」

「ああ、分かってるよ」

「それを聞いて安心いたしました。それでは、良き夜をお過ごしくださいませ」

一部のランタンの灯りが消え、カウンターの向こうから人の気配が消える。

同時にカウンターの隣にある扉がロックの外れる音が静かに響き、ひとりでに開いていく。

その先へ進むとレンガ作りの通路が伸びており、床には絨毯が敷かれ、端か

ら覗く切石の床は綺麗に磨かれているようで美しく光を反射している。

それもあつてか、贅沢に飾られた無数のランタンによって広い通路は奥の方まで明るく照らされていた。

足音すらも沈み込む赤い絨毯の廊下を進み、俺は【七】と札の付いた扉の前にまでやってくる。

余計な装飾などはないシンプルな、しかし高級感ある扉。

俺はその扉の前に立ち、はつきりとノックをする。

一度——そして、少し間をおいて二度。

相手の方は貴族の女性であることも多いため、俺は自分の知る形式ではあるものの礼式に則って扉を叩いた。

……返事はなかった。

しかし、鍵が外れる音が静かにと響き、扉がゆっくりと開いていく。
「あら、来たわね……」

その部屋は湯気のような、しかし爽やかな薫^{かお}りが漂っていた。
加えて甘い香水と芳醇なワイン。そして、深い香木の匂い。

「まずはお掛けになって……」

「……失礼する」

部屋の中央に置かれていた高級椅子に腰掛けていたのは一人の女性。

昔、護衛任務を務めていた際に見ることとなった舞台女優のように美しく、
彼女が身に纏っている衣装も一見すると商人などでも着ていそうなもので豪華
さは控えめなデザインのドレスだ。

しかしその質感から見ると、その値段は金貨数枚ではきかないだろう。

容姿から感じられる年は若く、二十後半～三十前半といったところだろうか？

だが、その落ち着いた雰囲気は壮年を過ぎた大人が持つような独特な落ち着
きようだった。

とはいえ、基本的に貴族はそういったものだ。

俺には想像もつかない苦勞が彼らにもある。

学園という場所での教育課程を経て、その精神はかなり鍛えられると言われ
ている。内心はどうあれ、少なくともその外見だけでは判断が付かないものな
のだ。

「初めまして。私の名前はクラリッサ。月の満ちたこの夜に共に語らえること、
とても楽しみにしております」

丁寧な所作。彼女は優しく、自身の胸に手を当てながら挨拶の言葉を述べる。
彼女の声は凜と鳴る鈴のようで、化粧によって整えられたその容姿は決して
下町などでは見ることは叶わないだろう。

「うむ、そうだな。俺——いや、私も一日千秋の思いであった。今日という日が無事に迎えられたこと、この上ない喜びにございます」

慣れないながらも俺は挨拶を返す。彼女は静かに微笑みながらワインのボトルへ手を伸ばした。

本来、ワインを注ぐのは使用人の役目であり、万が一いない場合は女性が注ぐのが決まり事だ。

しかし、それはあくまでも貴族同士のこと。

例えば平民上がりの貴族と純粋な貴族階級の人間がいれば前者が注ぐものだが、今回の場合で彼女はボトルを手を取った。

つまり彼女は、しっかりとこの館の仕組みを理解した上で貴族であろうが平民であろうが、立場を気にすることなく接してくれるようだ。

「……………」

余計な音を一切立てることなく、一滴の液垂れもなく、二つの美しいガラス製のグラスへ濁りのない液体が満たされていく。

「さあ、どうぞ。まずは一献」

「うむ、頂こう」

並んでいるグラスのうちの一つを手に取り、彼女が手を取るのを待つ。

手入れの届いた美しい手。グラスを手にするその細い指先はまるで陶器のようで、滑らかだ。

しかし一方でその指先には硬く膨らんだタコがあり、彼女は普段は書類仕事に追われている人物なのだろう。と結論付けた。

だが、それは余計な思考だ。

俺は内心で首を振って気持ちを切り替えると、彼女へと笑顔を返した。

「乾杯」

と、グラスを叩き合って俺たちはそのワインを口にする。
深紅というにはあまりにも黒く、しかし光に照らすと美しい赤い色を帯びた液体。漂ってくる香りは下手をすればそれだけで酔ってしまいそうなほどに芳醇だった。

「……美味しい……」

スツと流し込んだ途端、鼻を抜ける果実の香りと舌を刺激する濃厚な甘みは素晴らしいの一言で、下手をすればそのまま一気に飲み干してしまいそうなほどに飲みやすい。

決して甘ったるくはなく、程よい酸味がその甘みを引き立たせていた。
嚥下後に残るほんのりとした苦味もクドくはなく、確かな満足感に満たされた。

「ふふ……これね、私の故郷にあるルーグレイスの丘でしか採れない甘露葡萄^{エルヴァン}だ。」



から造られているのよ」

「ほお、あのエルヴァンから、どうりで……」

エルヴァンは有名な高級果物の名だ。

一つの果実が幾重にも集まって一つの束となっている果実で、温暖かつ高湿な環境でしか実をつけることがなく、またその実は採取してから数日しか持たないと言われている。

だからこそ、そこを訪れた貴族や商人はたとえ一粒であろうと金貨を支払ってでも口にしたいと考えるほどの品物だ。

ウワサから名前だけは知っていたが、確かにこれはクセになる。

「む、しまった……」

本当ならもう少し味わって飲むつもりだったのに。

空になったグラスを見て思わず俺は声を漏らした。

「ふふ……お口に合って良かったわ」

彼女は笑顔を崩さず、再びボトルを手にとると俺のグラスに注いでくれる。

「ねえ、貴方。見たところかなり鍛えてるみたいだけれど……」

二杯……三杯……。

酒に心地よく喉を鳴らしていると、彼女はゆったりとした口調で尋ねてくる。

そして、彼女は確認をとってから俺の空いていた手を取った。

「それに、この手。戦いに慣れている男の手ね……」

幾千もの戦闘によって獲物の柄に慣れ親しんだ節くれた指。

多くの血に濡れた傷だらけの手にはゴツゴツとしたマメが硬く残っており、強張っている。お世辞にも美しいとは言えないだろう。

「ふふ……素晴らしいわ」

彼女は、おそらく心からの賛美を口にする。

とはいえ俺にとってこれはそうせざる負えなかったが故の産物だ。

若い時に死にたくない。と醜く足掻^{あが}いただけだ。情けなく生にしがみついて藻掻^{もが}いただけのものだ。

そんな手を彼女の小さな手が包み込んで、その細い指が優しく、どこか愛おしそうに滑っていく。

「ねえ失礼なのは分かっているけれど、貴方はもしかして名のある騎士なのかしら？ それとも二つ名^{エビテット}持ちかしら？」

「その二つなら後者だな」

「まあ……」

エピテット、それはつまり平民が貴族として選ばれた際に与えられる称号だ。ギルドを管理する長と貴族たちによってこれまでの功績から名を与えられる。俺の場合、村々を襲っていた大型魔獣を何十体か狩った事から『人喰い狩り^{パニツシャーパニツシャー}』

なんて場違いな程に立派な名前を頂いている。

その結果が戦闘に次ぐ戦闘の日々への突入だった。というわけなのだが。

「きつと、素晴らしい活躍をなさったんでしょね」

「昔の話だ。今はもう……隠居みたいなものだ」

「あら？ 戦いに身を置くもの。一度剣を握ったらそのような言葉とは縁がないものではないの？」

その発言には少しだけ棘がある気がしたが、それはおそらく彼女の中にある何かによるものなのだろう。

それをいちいち聞くことはここではしない。してはならない。

何者にも触れられたくない過去というものはあるものだ。

「確かにそういったものもあるだろうな……だが、私にはもう剣は握れない」「何か、あったの？」

「この場所を知る前、私は蠍^{スコープ}の毒を喰らってしまった。どうにも左^{ひだり}の手の動きが鈍くてな……」

「でも貴方はグラスを持ててるじゃない」

「確かに。だがそれはこれがワイングラスだからだ。これが剣となれば話が別だ。例え持てる武器^もを探し出したとしても魔獣や野党の攻撃を受け止めるのは叶わないだろう」

「もう片方の腕で武器を振ることはできないの？」

「そりゃあできるだろうが、右と左とでは武器を振った時の感覚がまるで違う。その感覚を取り戻すには新人として一からやり直す他ないだろう。それができれば、の話だが」

「武器を握ったことがないからわからないけれど、それをすることは出来ないのかしら？」

「……ああ、そうだなあ」

質問に次ぐ質問。

クラリッサに一体どのような意図があるのかは分からなかったが、こうして聞くということは似たような疑問を普段から胸に秘めていたということに違いないだろう。

細かな詮索はすべきではない。

だが、そうした心のモヤを晴らすことぐらいはしたってバチは当たらない。

「……例えば、貴女は書類仕事などはするだろうか？」

「ええ、行いうわ」

「では普段ペンを持っている手と逆の手で文字を書けるか？　と言われたら無理だと答えるだろう？」

「確かに、そうかもしれないわね」

「そうだ。だが……例えば俺の場合、もう左手でペンは握れない。ならば右手で書けられるようになればいいわけだが、その間の仕事は誰が代わりにやってくれる？」

「そうね、他の文官を雇うかしら？」

「そうだな。だが、そもそも代わりがいるというのであれば、もはや俺は必要ない。雇う側からすれば、新しく雇った文官を使えば良いからだ。違うか？」

「……あつ」

何か納得したのか、彼女はわずかに目を見開くと、口元に手を添える。

「分かったか？」

「ええ……そう、そういうもののね」

「ん？ ああ、そういうものだ」

しばらくの沈黙。

俺の手から彼女は手を離すと、どこか遠くを見るような目で悲しげな表情を浮かべる。

「そう……そういうことなの」

クラリッサは自分の中で何か納得したかのように呟くと、再びグラスを手にとった。

そして、再びの笑みを浮かべて優しくグラスを回した。

「さ、早く飲みましょう？ 香りが飛んでしまつては台無しだわ」

「ん？ ああ……」

言い訳か、それとも何かしらの気持ちが晴れたのか。

彼女は幾分かスッキリしたような表情を浮かべると、再び乾杯の合図を鳴らした。

「む、これは美味しいな」

酒も進み、二人は隣り合って腰掛けながらテーブルに並べられている料理にも手をつけ始める。料理と言っても酒のつまみなわけだが。

一つは干した果実の詰め合わせ。

大きなものは食べやすい大きさに切ってあるようで、どうやら木の棒を刺して食べるようだ。

初めて見る食べ方だが、手が蜜や砂糖などで汚れないのは悪くない。

それにおそらくは何かしらの蜜につけてから乾燥してあるようだ。

砂糖のように粉っぽさはなく、かといって保存食のような硬さもない。

こうして楽しむために作られた贅沢な甘さが口一杯に広がっていく。

「これも、美味しいな」

「ふふ……お口にあって良かったわ、こちらのスナックはどうかしら？」

と、差した先にあったのは平べったい焼き菓子とその上に乗っている木の実、黄色いのはチーズだろうか？

一つ手にとっていただくと、サクリという心地よい音とともに焼き菓子が割れ、香ばしい香りとはんわりと効いた塩の味が口の中に広がっていく。

こういった食べ方をするのは初めてだが、いくらでもいけてしまいそうだ。

「どう？ 気に入った？」

「ああ、どれも酒が進みそうだ」

「そう……良かったわ」

素直に答えたただだったが、クラリッサもどこか緊張していたのだろう。彼女は安堵したように息をついた。

(……もう少し、肩の力を抜いてもらうべきだろうな)

「んん……そうだな。酒の味もこの菓子も素晴らしいものだ。それからこの匂い、なんというか心地いいな」

もう少し上手いことは言えないのか。と無理矢理に引き出した褒め言葉は結局拙いものとなってしまっている。

だが、俺の言葉に彼女は柔らかな笑みを浮かべた。

「でしょう？ この部屋には『魔法』で満たされているもの」

「魔法？ だが、この館での魔法発動は……ああなるほど、その香炉か」

「ええ、その通り。あれには『眠癒香木』^{コウファール} っていう私の国にある樹木から作られているの。その花の蜜は眠りの病に効き、その樹木の香りは心を安らかなものに整えてくれるのよ？」

「なるほど、そう言われてみれば……なんというか、懐かしい気がするな」

花のような、果物のような、しかしよく考えると違う。
なんとも爽やかな匂いだ。

風呂もろくに入っていない冒険者のいる安宿では決して嗅ぐことができないような、清潔感のあるその匂いを俺はゆったりと味わっていた。

「ねえ……」

そしてクラリッサはおもむろに持っていたグラスをテーブルに置くと、さらに俺との距離を狭め、そして体重をこちらに預けてきた。

衣装越しに彼女の柔らかさが俺の腕に伝わってくる。

俺もこの先の行動を予測し、静かにグラスを置いた。

もう、言葉を交わす必要はない。

俺がクラリッサの頬にそっと触れると、彼女も静かに瞳を閉じた。

「……ちゅっ……」

ほんのりと残っていた果実酒の味を感じながら、俺は彼女と唇を重ねる。

「今日だけの相手って割り切ってもらえるかしら？」

彼女の言葉は低く、どこか寂しげだった。

「割り切れる日もある。だが、割り切りたくない夜もある」

肯定も否定もしない。

俺はそれらしい答えを返す。

だが、その言葉は俺の本心であることに変わりはない。

彼女への気持ち。

彼女への思い。

それが正しく伝わってくれたのか、それは分からないが、クラリッサの唇の端が僅かに上がるのをしっかりと視界に捉えた。

警戒心を解いてくれたのか、俺との距離をさらに狭め完全に密着する体勢と

なったクラリッサ。

その表情には安堵にも似た笑顔が浮かんでいた。

「それじゃあ貴方と、そうね……割り切れない夜にしてくれるかしら？」

そう言って彼女と再び唇を重ねた。

深く……深く……。

鼻息を掛け合いながらの長いキス。

会話が途切れ、暖炉の炎だけが小さな音を立てている空間で、ゆっくりと舌が交わっていく。

「ん……っ……」

柔らかな彼女の舌が蠢くのを感じながら俺たちは互いの唾液を味わっていく。近づいたことで感じられるのは彼女が発する匂いだ。

香水であるのか、彼女特有の香りであるのかはわからないが、ほんのりと甘

く、いつまでも嗅いでいたいものだった。

そして共に口にした焼き菓子の風味をほんのりと感じながらもそっと唇を離すと銀色の糸が伸び切れて、滴った。

「それじゃあ、向こうに行こうか」

「ええ……」

彼女からの了承を受け取って俺はこの広い部屋の奥にあるベッドを指差す。大の大人が四人ほどが寝ても余裕がありそうなほど巨大な寝台。天井付近には緩やかに天幕が垂れ下がり、美しい装飾が施されている。

まさに貴族のためにあるベッドと言えるそれに俺たちは近づいていく。

「ん……ちゅ……ちゅっ……」

再び唇を重ねながら俺は彼女の衣服へと手を伸ばし、腰に結ばれているリボンを解いた。

そうすることで彼女が身につけているドレスは拘束が緩み、ふわりと腰回りのラインが消える。

これで肩紐をずらせば、そのままストンと下着姿が露わになった。

胸元の下着は支え布で持ち上げられているだけの簡素なもので、下着もまた布と紐だけで構成されているものだ。

だが、よく見てみると布地の部分には花のような刺繍が施されており、作りはともかく、下着として高級感があった。

それらもまた紐を解けばあっさりと脱がすことができる構造のようだが。

俺もまた身につけていた布の服を脱ぎ捨て、下着姿になると彼女の豊かな胸へ手を伸ばした。

「ちゅっ……んっ……」

暖かな室内で肌の擦れる音が鮮明に聞こえてくる。

服という余計なものが消えたおかげでクラリッサの体温が直接感じられるようになり、俺は彼女の研鑽された肌艶をこの手に感じ取る。

反発力のある柔らかな胸の感触。^{バスト}細く程よく引き締まったウエスト。綺麗な形をしたヒップ。

「んっ……ふうっ……」

彼女の肌を撫でていると感じてくれているのか、時折彼女の口端から甘い声が漏れ出てくる。

豊満な乳房を優しく揉みしだくと、俺の後に回してる彼女の腕に力が籠もる。視線を下げると彼女の胸の一点がプツクリと膨らんでいるのが視界に入る。

「んっ！」

軽く摘んでやると、なんとも小気味よい声が彼女から漏れた。

貴族の女性は基本的に体を持て余していることが多い。

成人する前にはすでに許嫁という形で伴侶がいることがほとんどだが、肝心の相手側が職務で忙しかったり、長期的に家を空けることも多いため、行為に耽るということがそもそも出来ないのだ。

加えて一夫多妻が認められている国となるとさらに行為の回数は減るだろう。そして、そういった女性は木製の張り型^{ディルド}を購入して一人で慰めることが多いとされており、その過程で普通の刺激では満足できなくなり、強い刺激を求める傾向にある。とのことだ。

受け売りだが、その話も出まかせというわけでもないだろう。

「んんっ！ んうっ！ ああ……」

実際、クラリッサはそれなりに飢えていらしく、軽く摘むだけでは飽き足らず、そのまま捻ってやるとかなりいい声で鳴いてくれた。

太ももを撫でながら彼女の秘所に触れてやると、もう準備はバッチリのように

だ。

俺は彼女をベッドへと寝かせると、その側に置かれているボトルを手取る。これは体の乾燥を防ぐための薬液でこの館に常備されているものだ。

「ん……気持ちいいわ……」

しっかりと手の上で温め、彼女の体に塗っていく。

お腹からウエスト、太腿から足先まで。しっかりと塗り込んでいく。

「はあ……はあ……」

もう限界そうだ。

クラリッサは呼吸を荒げ、刺激を求めようと彼女の体はモゾモゾと動き出す。とはいえないきなり挿れてしまつては芸がない。

薬液でテラテラと輝く彼女を起こし、彼女の後に腰掛けると手についた薬液を塗り広げながら両手で胸への刺激を始める。

「ん……んう……」

外側からゆっくりと盛り上げるように揉みながら、だんだんと目的の一点を目指すように動かしていく。

「気持ちいいか？」

「ん……ええ良いわ。こんな風に触られるのは初めてよ」

「そうか……」

これだけ大きな胸を弄らないとは。

残念なことに、彼女の相手はクラリッサを喜ばせようという気概はなかったようだ。

結局のところ貴族における男女の関係など形式ばっていることがほとんどらしく、貴族として跡取りを生み出すための道具のようにしか扱わない貴族も少なくはないらしい。

好色なものであれば営みは手厚いものとなることも多いらしいが、そういったものは侍女にすら手を出すこともあり、結局のところ回数は少なくなる傾向にあるらしい。

「なら、もっとして欲しいことはあるか？」

「そうですね、あまり焦らされるのは嫌いね。それ以外は、貴方が見つけてご覧なさいな」

「そうか……では……善処しよう」

「んうっ！」

乳首をつねり、俺はクラリッサの前に立ち、完全に下半身を露出させる。

「まずは大きくしてもらおうか」

「……わかったわ」

少し困惑した様子だったが、クラリッサはすぐに笑みを浮かべて俺の陰茎に

そっとなで触れる。

まだまだ本調子でない俺のモノはだらしく垂れ下がっており、彼女は見たこともないものを見るような感じだったが、覚悟を決めたように手に取った。

「こう、するのよね？」

と、クラリッサの手が俺のペニスを包み込んで前後に動かし始めた。

あまり経験がないのだろうか？

彼女の動きはどうにもぎこちなく、気持ちいいとはお世辞でも言えそうになり。

「口を使ってもらえるか？」

「口を？ ……分かったわ」

手で扱きながら、彼女は恐る恐るといった様子で俺のイチモツの先端を舐め始める。

これもまたなんとも弱々しい攻めだったが、健気に頑張ってくれているという背徳感は俺の情欲を程よく刺激してくれ、少しずつであるが怒張していき、反り立ち始める。

「すごい。こんなふうになるのね……」

「まるで初めて見たみたいな反応だな」

「ええ、知識としては知ってるけど、初めてよ」

「む？ そうなのか？ 君ほどの歳ならば経験あるものだと思っていたが」

「経験がまるでないと言うと嘘になるけれど、少ないのは確かね」

「そうか……」

経験が少ないという事実は俺の情欲を湧き立たせるには十分すぎるもので、すっかりと血液が集中していた。

「よし、もういいぞ」

「んば……すごいわ、こんなに大きくなるのね」

「見るのは初めてか？」

「こうして間近で見るのは初めてね」

「そうか、ではこれから行うこともわかってるな？」

「ええ、大丈夫。私の準備はバッチリよ」

そういつて彼女はベッドに横になると大きく脚を開いてみせた。

確かにしっかりと濡れているようだが、貴族の女性はそういった準備も済ませるように訓練を受けていると聞いたことがある。

どのようなしているのかは分からないが、中途半端な行為は互いに楽しめなくなってしまう。

それではまるで意味がない。

彼女には気持ちよさそうに喘いで貰わなければ、俺としても満足感は無くなっ

てしまうのだ。

演技でこっただけが楽しんでおしまいというのならその辺の娼館にでも行って娼婦でも抱けば良いのだから。

俺は彼女の近くにまで寄ると、胸の膨らんでいる場所に唇を寄せた。

「え？ あ、そこは——んうっ！」

美しいピンク色の部分を舌で攻めながら、彼女の蕾の中にゆつくりと指を入れてみる。

予想通り。奥までは濡れていないのか、指の滑りが悪い。

指先に伝わるわずかな抵抗と彼女の身体が微かに強張るのを感じ、俺は焦る心を宥めるように動きを止めた。

「……やはり、少し硬いな」

「ごめんなさい……っ、でも、嫌なわけじゃないの……」

申し訳なさそうに眉を下げ、潤んだ瞳でこちらを見上げる彼女。

その潔癖さと奥底に眠る情欲のギャップが俺の理性をじりじりと削っていく。俺は彼女の耳元に唇を寄せ、熱い吐息と共に囁いた。

「謝る必要はない。これからゆつくりと、蕩かしていけばいいからな……」

再び、今度は薬液を含んだ指で彼女の蕾を優しく、しかし執拗に愛で始める。表面をなぞるだけでなく、円を描くように。あるいは、彼女の呼吸に合わせて、少しずつ、確実に深みへと沈めるように。

同時に、もう片方の手で彼女の豊かな胸を手のひら全体で包み込み、指先でその尖端を弄る。

「あ……んっ……ああ……っ！」

上下からの執拗な刺激に、彼女の背が弓なりに反る。

先ほどまでのぎこちなさはどこへやら。彼女の身体は次第に熱を帯び、指の

動きを滑らかにする蜜が溢れ出し始めた。

蕾の中へ指を入れてみると、キツさはそれほど変わらないものの先ほどよりも滑りが良くなった。

「さっきよりずっと、受け入れる準備ができてきたようだ」

「はあ……はあ……、つ、もう……何がなんだか……」

彼女の瞳は徐々に熱に浮かされて、焦点が定まらなくなってきている。

俺は一度指を引き抜き、代わりに自身の反り立ったモノを、彼女の秘所の入り口へと押し当てた。

ヌルリとした薬液と彼女自身の熱い雫が混ざり合う。

前後に擦り付けるように動かすとピチャピチャと官能的な音が耳を打つ。

「クラリッサ、目を開けて俺を見てくれ」

「……ん……あ……っ」

促されるまま、彼女が重い瞼を持ち上げる。

そこには自分を求めて昂る男の情欲と逃れられない快楽への期待が混ざり合った濃密な空間があった。

「入れるぞ。痛かったらすぐに言え」

「ええ……。貴方を……。私の中に、刻み込んで……」

彼女が自ら腰を浮かせ、俺を迎え入れようと脚に力を込める。

その無垢で、かつ大胆な誘いに、俺は最後の一線を越えるべく、ゆっくりと、腰を下ろしていった。

「ひう……」

俺の先端が彼女の入り口に触れた瞬間、クラリッサは短く息を呑み、シーツを掴む指にギュッと力を込めた。

指先での準備は整えたつもりだったが、いざ本番となればその差は歴然だ。彼女の花園は、まるで侵入者を拒むかのように、あるいは大切に守り抜かれてきた証のように、固く、熱く、窄まっている。

経験はあると言っていた気がしたが、これでは初めてを経験する女となんら違いはないような気もする。

「……っ……あっ……」

「辛いかな？ 一度止めるかな？」

俺の声に彼女は首を横に振った。

頬は朱に染まり、乱れた髪が枕に散っている。

「いいえ……このままよ。このまま……貴方を感じていたい……」

その言葉が、俺の中に残っていたわずかな理性を焼き切った。

俺は彼女の太ももをさらに高く持ち上げて、自身の重みをゆっくりと預けていく。

少しずつ、閉じた道を進むごとに彼女の身体が小刻みに震え、熱い内壁がギュウギュウと俺を締め付けてくる。

それは苦痛というより、未知の快楽に対する防衛本能のような、心地よい圧迫感だった。

「ふう……あああっ！」

半分ほどは受け入れたところで、彼女の口からこれまでで一番大きな声が漏

れた。

痛みに顔を顰^{しか}めながら、その瞳には陶酔の色が混じっている。

俺は彼女の耳たぶを甘噛みし、再び両手で彼女の柔らかな胸を揉みしだいた。薬液で滑りの良くなった肌が俺の動きに合わせて艶かしい音を立てる。

「大丈夫だ、クラリッサ。力を抜いて……俺に身を委ねろ」

「え、ええ……」

彼女の腰を優しく撫で、緊張を解きほぐしていくと、やがて彼女の身体から力が抜けていき、代わりに溢れ出た蜜が結合部を濡らし、結合の音をジュプリツと鈍く妖艶なものに変えた。

「はっ！ あああん！」

完全に奥まで達した瞬間。彼女は大きく目を見開き、そして力なく俺の肩に顔を埋めた。

「はあ……っ、はあ……。すごい……。こんな……身体の奥まで、貴方が……」

初めて知る完全な充足感に、彼女の身体が細かく波打つ。

俺は彼女の首筋にキスを落としながら、ゆっくりと、しかし確実に腰を動かした始めた。

「あっ……あっ……んう……」

暖炉の火が爆ぜる音と肌がぶつかり合う音。そして貴族の令嬢という殻を脱ぎ捨てた彼女の甘い喘ぎ声だけが暗闇の中に溶けていく。

「んあ……ああっ……あああ……」

腰を引くたび、粘り気のある熱い蜜が絡みつき、腰を戻すたびに彼女の最奥を容赦なく突き上げる。

先ほどまでのぎこちない貴族の女としての余裕はもはや微塵も残っていない。

「んうっ！ あ、あああっ！」

突き上げる衝撃のたびに、クラリッサの大きな胸が上下に揺れ、葉液で光る肌がいやらしく波打つ。

俺は彼女の細い腰をしっかりと掴み、逃げ場を塞ぐようにさらに深く、重く腰を打ち付けた。

「どうだ？ クラリッサ、気持ちいいか？」

「はあ……はあっ！ すご、い……頭の中が……白くなって……んんっ！」

彼女は俺の首に腕を回し、しっかりとしがみついてくる。

内壁は経験の少なさを物語るようにひどく敏感で、俺の動き一つひとつに過剰なほどに反応し、細かく脈打っては俺を締め付けてくる。

俺はさらに彼女の膝を押し広げ、結合部を剥き出しにするようにして、その中心にある突起を指で弾いた。

「ひゃあっ！ あ、だめ、そこっ、そんなのっ！」

上からの激しい突き上げと秘部への執拗な愛撫。

二重の刺激にクラリッサの呼吸はさらに荒くなり、瞳は快楽の極地を求めて虚空を彷徨い始めた。

「好きなだけ声を出せ。この部屋には、俺たちしかいない」

「あ……あああっ！ もっと……もっと、深くうっ！」

彼女が自ら腰を跳ね上げ、俺をより深くへ招き入れようとする。

本能のままに貪り合う音だけが豪華なベッドの中に響き渡る。

彼女の身体が限界まで強張り、指先が俺の背中に食い込んだ。

「あっ……くるっ！ いっちゃううっ！ あああーっ！」

絶頂の瞬間。

彼女の窄まりはこれまでになく激しく俺を噛み締め、熱い雫が俺のペニスを激しく濡らした。

俺もまた、彼女の最奥に己のすべてを叩きつけるべく、最後の一突きを見舞った。

「おお……」

貴族の女として、男を喜ばせる訓練を受けているだけあって絶頂における締め付けは並の女には出せないキツさだ。

根本から子種を搾り取ろうとヒダが蠢き、一滴も逃すまいと吸い付いてくる。

「クラリッサ、いくぞ？ 奥に、出すぞ？」

「い、いいわ。来て。たくさん、出して！」

クラリッサの最奥から突き上げてくる熱い波が俺にまで伝わってくるようで、一瞬にして理性を完全に焼き尽くそうと襲ってくる。

彼女の窄まりは、絶頂に震えながらもなお、強欲に俺を締め付けて離そうとしない。

「いくぞ！ いくぞ！」

「ああ、ああああ！」

睪丸が収縮する感触。生命の源が登ってくる感覚を感じながら俺は彼女の奥底へと鈴口を押し付ける。

ドクンドクンと、脈打つように一気に放出が始まり、彼女の部屋の中に全力で打ちつけ、満たしていく。

「はあっ……はあっ！ すご、い……中が……熱くて、溶けちゃいそう……」
白濁した視界の中で、彼女は力なく笑みを浮かべ、俺の首筋に顔を埋める。だがこれで終わりではない。

一度火がついた彼女の情欲は、長年の飢えを癒やすかのように、さらなる刺激を求めて蠢き始めていた。

俺は彼女の腰をさらに高く持ち上げ、密着したまま、今度は粘りつくような

動きで腰を回し始めた。

「あんっ！ あ、ああっ。また、変な感じがっ……」

「まだ足りないんだろう？ これまでの分も、全部注ぎ込んでやる」

耳元で囁きながら、薬液で濡れた彼女の胸を再び強く揉みしだく。

指先で尖端を弾くたび、彼女の腰がビクンツと跳ねて、結合部からはジュプツ、ジュルリつと卑猥な音が溢れ出した。

「んんっ！ あ、あああっ！ やだ……そんなに激しくっ！」

彼女の言葉とは裏腹に、その脚は俺の腰をしつかりと跨ぎ、より深くへと自分を押し付けてくる。

貴族としての矜持も、淑女としての嗜みも、この熱狂の前では無意味だった。ただ一人の女として俺という男に貫かれる快楽だけに身を委ね、彼女は何度も、何度も、その背を弓なりに反らせていた。

「クラリッサ、こっちを向け……もっと俺を見ろ」

強引に彼女の顔を自分の方へ向けさせ、唇を塞ぐ。

「んちゅ……じゅ……ちゅ……」

舌を絡ませ合い、唾液を交換しながら、俺はラストスパートをかけるように腰の動きを速めた。

「あっ……ああああーっ！」

再び訪れる絶頂。彼女の身体が激しく痙攣し、俺のモノを内側から強く、熱く、何度も絞り上げる。

俺もまた、その凄まじい締め付けに抗うことなく、彼女の最奥へと熱い迸りをすべて吐き出した。

暖炉の火が静かに揺れる中、重なり合った二人の荒い呼吸だけが、いつまでも部屋に響いていた。